

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第42回

万葉の川心

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

志貴皇子の權の御歌一首 卷第八 一四二八番歌

石ばしる垂水の上のさ蕨の

萌え出づる春になりけるかも

一人の若者がいた。自分のやりたかったことを仕事にもち、理想と現実との狭間でもがきながら、それでも見るもの全てで吸収するかの勢いで夢を追っていた。その彼を恋する乙女がいた。彼女もまた仕事をもち、夢を追っていた。人生を共に歩みたい人とめぐり逢いながら、結ばれるには幾つもの障害があった。若者はそれを乗り越えようとしていた。がむしゃらではなくて、時間をかけてひとつずつ。解決がつく時を待っていた。乙女は信じていた。彼のこと、自分のこと、そして、この長い冬の後には必ず春が来ることを。だから「結婚」について二人は何も口にしなかった。周囲の心配と余計な後押しは凍てつく冬の空に空回りしていた。

合格という名の春。就職、昇進、結婚、出産、そして、失意のどん底からの復活。人は人生のさまざまな「春」を待っている。長く暗いトンネルを抜けたときのまばゆい光。雪解けに踊る水。重たい雪も土も突き抜けて萌える若芽。あたたかく柔らかな空気と土の匂い。五感の全てに響き渡り、その喜びを歌わずにいられない、そんな春。冬が辛ければつらいほど春が来た喜び



は大きい。「あなたには何年も待っている春がありますか。」今年あたりきつと来る・・・この歌を何度も口にしてしていると、そう信じられる気がする。垂水は垂れる水から小さな滝の意である。石の上を水が走って流れ落ち、そのほとりて飛沫を受けてワラビが萌えている。その様子を、まさに握りこぶしをふりあげているような感じ」と写真の碑の書、犬養孝氏はこう表現している。この歌は天智天皇の皇子である志貴皇子が嬉しいことのあるおりに詠んだものだが、誰もが学生時代に一度は出合ったことがあるのではないだろうか。万葉集を語るたくさんの本にもこの歌は取り上げられている。意もさることながら、「の」の重なりリズムが躍動感にあふれ、まさに万葉集は「歌」の集まりなのだと思わせる。リバイバルで流行し歌われる歌は数々あれど、この歌はまさに千三百年を越えている。春の喜びも人生の歓びも、時を越え人々の心に降り注いでいる。雪解けの川音は澄み、流れは蕩々としてのびやかこの上ない。萌えるワラビのガッツポーズを、今冬に苦しむあなたに贈りたい。誰にも来る。必ず来る。春は、もうすぐそこに。

歌碑は、文学博士犬養孝氏の功績を讃えて横浜市西区の伊勢山皇大神宮境内に建てられている。

若者と乙女のこととはそっとしておこう。二人なら大丈夫。手の上の流し雑も、やさしくほほえんでいるから。